

創立20周年を迎えて

日本セトロジー研究会第19回大会会長 平口 哲夫

日本セトロジー研究会創立20周年を記念し、発足地において第19回大会を開催することができ感無量です。私も発足当初からの会員の一人ですが、ただ最古参だからというのではなく、山田致知先生、児玉公道先生に続いて、図らずも第三代の代表を4期8年間担当し、現代表の山田格先生にバトンタッチした第16回(函館)大会の3年後に大会会長をお引き受けするまでの、さまざまな出来事が走馬灯のように思い出されるからです。

考古学が専門の私がセト研に入会することになったのは、1982・83年に能登の真脇遺跡で多量に出土したイルカ骨の調査を担当したことが直接のきっかけです。しかし、実はそれ以前から鯨類学関係とは縁がありました。仙台での学生・院生生活に終止符を打って1974年に金沢に戻ってきた私は、1975・76年、宇ノ気町(現・かほく市)上山田貝塚の発掘調査主任を引き受けたことから、動物考古学の分野も手がけることになりました。この貝塚からは大きなクジラの肋骨も出土しております。上山田貝塚の報告書は1979年に刊行されましたが、その作成作業と併行して七尾市赤浦貝塚出土動物遺体の調査も担当していたものの、手元に比較標本がないものですから、金沢大学医学部解剖学教室の山田致知教授を訪ねて相談したことがあるのです。また、魚類標本を得るために旧・いしかわ動物園内にある水族館を訪ねたこともあります。この縁で、セト研発足時に私にもお声が掛かったのでした。

さて、私が勤務する金沢医科大学の故・関泰志教授(解剖学)は鯨類の神経系統を研究しておられましたが、そのことを私は長らく知らずにいました。あるとき、医科大前のバス停でバスを待っておられる関先生をお見かけしたので車を止めてお乗せし、金沢の中心街までお送りしました。それがきっかけで先生との交流が始まり、私が入手したイルカの脳を提供する代わりに、骨格標本の作製に協力していただいたこともあります。金沢医科大学からは、セト研代表をしていた間、毎年学会開催補助金をいただき、教授になってからは橘勝会(金沢医科大学後援会)からも補助金をいただきました。今回も両方の恩恵に浴しています。末尾ながら厚く御礼申し上げます。

近年、学生や若い研究者の入会が増えてきており、心強いかぎりです。日本海セトロジー研究グループから日本海セトロジー研究会、そして日本セトロジー研究会へと改称して現在に至ったセト研のさらなる発展を期待しています。